

メディア・リテラシーを育成するパッケージ開発と授業実践

金沢星稜大学経済学部 教育工学専攻 岡部 昌樹 okabe@seiryu-u.ac.jp

金沢星稜大学経済学部 教育工学専攻 村井 万寿夫 murai@seiryu-u.ac.jp

【概要】

メディアを「記号」「装置」「システム」といった視点概念で、リテラシーを「教養」「機能」「批判」という次元で捉え、クロスすることでメディア・リテラシー教育の目標を明確化した。本論文では『記号と教養』の視点を重視するカリキュラムモデルと実践パッケージを提案する。また、経済学系大学において、映像に対する学習者の主体的・自己反省的な態度を育成するという視点から「メディアコミュニケーション論」（4単位：3年次開講）の前半部に演習として位置づけたメディア・リテラシー教育（映像リテラシー教育）の実践とその成果を紹介する。

1. はじめに

2000年に映像情報の「使い手」の立場を重視する映像リテラシーを育成するカリキュラム・パッケージを開発し、主に小・中・高等学校の“総合的な学習の時間”において実証研究を継続してきた(1)。大学の専門講義科目においても、映像モードの活用頻度は高まっている。しかし、学生の多くは、メディア（特に記号としての映像）が提示する表現や内容を批判的・自覚的に受容し、判断し、映像モードを生かして発信する学習体験が乏しい。学習モデルはこれまでも数多く提案されているが、わが国では映像情報を体系的に処理・活用するパッケージやモジュールキットが不足していることが要因の一つと思われる。

2. メディア・リテラシーの次元と視点

リテラシー教育は、史的には教養的、機能的、批判的という3つの側面から捉えられてきた。機能的側面は、経済活動との関連が強いことから、これまでも重点が置かれてきた。しかし、欧米での実践は、Critical Thinkingがキーワードとなり、“メディアを通して送られてくる情報に対し、批判的に読み解く能力を身に付ける。”といった批判的な側面が過度に強調されているように思われる。確かにメディアを介して情報を得る時、一定のバイアスは存在する。しかし、その前に私たち自身の解釈の在り方自体を問う必要がある。自分の受け取り方を相対化する行為があってはじめて、Critical Thinkingの育成も可能と思われる。

また、デジタル化が進む中で、複合的概念であるメディアを論ずる場合、種別概念で捉えることは今日では意味をなさない。メディアを解釈する次元を、「記号」「装置」「システム」といった視点概念で捉えることで、メディア・リテラシーを論ずる焦点が明らかになる(2)。この実践では、メディアの記号次元とリテラシーの教養的視点（映像リテラシー）に焦点を当てている。

3. 映像リテラシーの特性

3領域・6能力の視点で構成している。

- ・「受け手」としての基本能力である『理解力』を最も重視する。さらに、シンボリックなシーンを直観的に見抜き、柔軟に感じとる『洞察力』を重視している。
- ・「使い手」としては、情報活用能力の育成という視点から、情報の収集に始まり、選択、組み合わせ、加工、創造、伝達といった過程を『探索力』『発信力』という能力項目で捉えている。
- ・「作り手」としては、現状を鋭く認識する能力を基本に据えた。特にマルチメディアを効果的に生かして、自己主張できる能力として、『構成力』『創作力』を重視している（Table1）。

4. 関連科目（メディアコミュニケーション論）とメディア・リテラシー教育

4.1 科目特性

メディアコミュニケーション論は、経済学部ビジネスコミュニケーション学科の専門選択科目（4単位）であるが、前半（2単位）をメディア・リテラシー教育（演習）にあてる。

4.2 前半の目的

民主社会における望ましいメディア（主に映像）のあり方を考え、論議し、且つ意識化することで、メディアを育て上げる思想と実践を創り出す。そのために、メディア技術の側から示された目的に従った消費に終始するのではなく、社会の民主的基盤を育て上げる主体となることをめざす。特に、異なった情報態様の相互関係を考察し、その結果を効果的に表出するスキルを身につけるとともに、多様なコミュニケーション形態を創り出す能力育成をめざす（Table2）。

Table. 1 映像リテラシーのカリキュラム(メディア・リテラシーにおける記号と教養と領域)

領域	能力	視点	行動目標	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
受け手	理解力	論理	○映像構成の特色が指摘できる。 ○モンタージュの特色が指摘できる。	●		●				●		●		
		直観	・ 特定視点から感じ方の違いを指摘する		●									
	洞察力	推論	・ シンボルの関係づけができる ・ 視点移動ができる。			●	●					●		
		視点	・ 見方, 感じ方の変化を指摘する。									●		
使い手	探索力	収集	○タイトルから内容が予測する。 ○課題解決に必要なシーンを抽出する。					●	●					
		選択	・ 多様なメディアから情報選択できる。							●			●	
	発信力	態様	○映像に適切な言語情報を付加する。	●						●				
		複合	○シンボルを複合して, 映像表現する。 ○モードを異にする情報を映像化する。							●				●
作り手	構成力	技法	・ 技法の組み合わせができる。 ・ 技法を効果的に活用する。									●	●	
		立案	・ 意外性のある構成が提案できる。									●		
	創作力	分析	・ 態様の異なる情報特性を指摘する。 ・ KJ 法的処理で情報を構造化する。								●			●
創造		○情報関連図を映像モードで表現する。				●								

○ は映像リテラシー独自の行動目標

● は従来よりメディア教育や情報教育においても重視している行動目標

Table. 2 授業計画(テーマと行動目標)

	テーマ	中心的行動目標
1	オリエンテーションと予備調査	
2	番組分析1 (映像の言語化)	・ シークエンスを“形容句+名詞”で表現できる。
3	映像分析2 (モンタージュ)	・ モンタージュの特色が指摘できる。
4	番組分析3 (イラスト表現)	・ シンボルを組み合わせて映像表現できる。
5	シンボルの再構成	・ シンボルの関係づけができる。
6	ホームページのモード分析	・ モード特性が指摘できる。
7	パンフレットの構成分析	・ モード比率を分析して構成特性が指摘できる。
8	パンフレットの内容分析	・ 情報態様を一元化(数値化)して内容特性が指摘できる。
9	コマーシャルの構成分析	・ 時系列分析から構成特性が指摘できる。
10	コマーシャルの技法分析	・ 技法を抽出して, その効果を評価できる。
11	ニュース番組の構成比較	・ 異なる局のニュース番組を時系列で分析し, 構成特性が指摘できる。
12	数値情報の映像表現 I	・ 数値情報を分析して, 説得力のあるグラフに変換できる。
13	数値情報の映像表現 II	・ モード特性を生かした企画書が作成できる。
14	プロモーションイメージ	・ 企画書の表紙(プロモーションイメージ)を作成することができる。
15	ポスターで主張(構造改革)	・ KJ 法的手法で情報を構造化し, イメージを表出(ポスター)できる。

5. 映像リテラシー教育の実践事例

5.1 シンボルの再構成と批判的思考(第5回事例)

(1) 育成スキル

- ・シークエンスを“形容句+名詞”で表現できる。
- ・シンボルシーンを関係づけて、構成イラストとして表現できる。
- ・構成イラストをもとに、番組批評できる。

(2) 実践過程(90T)

- ・ねらいを確認する(5T)。
- ・“9.11事件”について知っていることを箇条書きにする(10T)。
- ・「アメリカはテロをどう報じたか」(ETV特集)を視聴する(45T)。
- ・視聴メモをもとに、シークエンスを言語表現する(5T)。
- ・指定サーバーのホルダーよりシンボルシーンを選択し、再構成イラストを描き、小見出しをつける。(15T)。
- ・再構成イラストをもとに、番組制作者の意図を考察する(10)。終了後TAに送信する(Fig. 1)。

(3) 評価と考察

「事前知識」「再構成イラスト」「批判的思考」について、教員とTA二人がそれぞれ5段階評価を行い、メールで結果を知らせた。

- ・シークエンスの言語表現(形容句+名詞)は、制作意図を論理的に理解するための一方途であり、数回のトレーニングによって身に付けることができる。
- ・シンボルシーンの選択は極めて直観的であり、一部のシーンに集中する傾向は見られが、制作意図の直観的理解を支援することができる。
- ・「事前知識」と「批判的思考」の間にある程度の相関が見られることから、“批判的思考”は“知識の再構成”とも言える。

- ・「事前知識」と「感性表出」、「批判的思考」と「感性表出」の間に全く相関がないことから、“理解力”と“洞察力”を関係付けて指導する必要があるかどうかは再検討を要する(Table. 3)。

Table. 3 予備知識と批判的思考と感性表出との相関

	I 事前知識	II 批判力	III 感性表出
平均	3.64	3.28	3.34
準偏差	1.11	1.23	1.00

IとIIの相関係数 R=0.53

IとIIIの相関係数 R=0.07

IIとIIIの相関係数 R=0.00

映像処理ノート応用タイプD 学籍番号(↓ ↓ ↓ ↓ ↓) 名前()
 作品名 (アメリカはテロをどう報じたか)

1 映像メモ

星条旗/I am American/CBC会長/hailed to lead USA /ブッシュ演説/シンポ・政府報道官。ジャーナリスト・軍人/CBS会長/ニューヨークタイムズ記者/政府報道官/ABC会長? /ビンラデン声明/ライス報道官/陸軍大将? /ベトナム戦争/湾岸戦争/プレス報道/取材記者/アフガン空爆/空爆被害/シンポ・ジャーナリスト

3 シンボルシーン(選択)

1



2



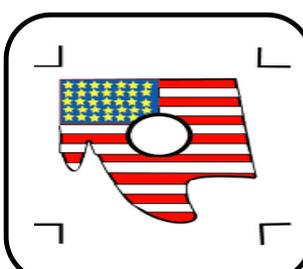
3



2 シークエンス

1	街に溢れる星条旗
2	ジャーナリストによるシンポ
3	通訳付きのビンラデン声明
4	圧力をかけたライス報道官
5	政府を支持するメディア
6	メディアに負けたベトナム戦争
7	取材規制された湾岸戦争
8	情報の少ないアフガン戦況

4-1 構成イラスト



4-2 小見出し
猪突猛進 メディアも!

5 批判的考察

シンポジストとの立場の違いは理解しなければならない。しかも、メディアは産業であることも事実である(スポンサーを必要とする。)。しかし、何故アメリカが主張する“悪の枢軸”が世界に広く支持されないのか、ジャーナリストは単に政府機関からの情報の少なさを批判するのではなく、独自の視点で取材すべきである。戦争体験の無い僕には、アメリカの非常時は理解を超えているかもしれない。でも、ジャーナリストは独自の視点もたなければ、存在価値がない。

Fig. 1 学生のノート事例

5.2 数値情報の映像表現Ⅱ(第14回事例)

(1) 育成スキル

- ・意外性のある構成が提案できる。
- ・モードを異にする情報を映像化できる。
- ・シンボルを組み合わせて、映像表現できる。

(2) 実践過程(概要)

10グループに分れて、石川県競馬局が実施した金沢競馬に関するアンケート結果(数値情報)をグラフ変換し、特性を分析した(第13回)。第14回では、予算30,000千円で、プロモーション実施計画書作成した(セールスポイントのイラスト表現, 使用メディアと内容一覧の提示, ポスターやイベントチラシのイメージ表現, 展開スケジュール, 実施予算書を含んでいること。Fig. 2)全体へのプレゼンテーションはセールスポイント(プロモーションイメージ)のみとし、自動処理アンケート表に入力して相互評価の結果を即時確認した(Fig. 3)。



(グループ内での企画書提案と討議)

Fig. 2 グループ内討議風景(3班)

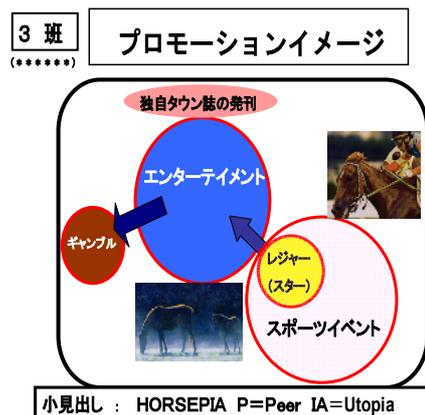


Fig. 3 個人別プロモーションイメージ

5.3 ポスター(構造改革)で主張(第15回事例)

(1) 育成スキル

- ・構造改革をメインテーマに、サブテーマを設定し、関連情報の収集、分析ができる。
- ・テーマ性を高めるため、収集した情報をKJ法的に処理できる。
- ・情報関連図を類似的に映像表現できる。

(2) 実践過程(概要)

- ・構造改革に関するキーワード関連図を作成するとともに、事前にレポートの提出も求めた。
- ・ソフトに習熟していない学生には、特別支援授業を実施した。受講生全員がドロー系ソフトの基本操作技能を修得した。ポスターは全て関連するアート展(日本海デジタルアート展、石川県CGコンテスト)で外部評価を受けた。



Fig. 4 ポスターで主張「観客のいない小泉劇場」(事例)

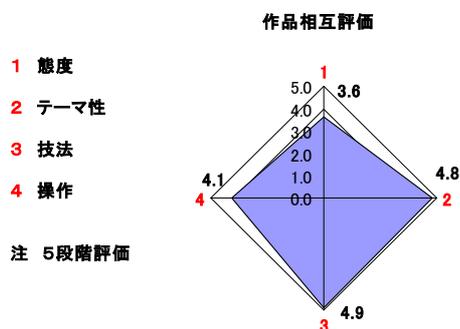


Fig. 5 「観客のいない小泉劇場」に対する相互評価

<参考文献>

- (1) OKABE(2002) Consideration of Media Literacy, and Development of a Training Program, The Third Asia Pacific Conference on Industrial Engineering and Management Systems, Taiwan.VIII-6.
- (2) M.Okabe, "A Practical Research of Screen Education as Education culture on", The Japan Association for the Study of Education Media, No.19, July.9,2005, p.p.17-22